シドニー日本人学校の国際学級と日本人学級の交流

前シドニー日本人学校　教諭
静岡県静岡市立井宮小学校　教諭　吉　川　　宏

キーワード：国際理解、交流、オーストラリアの教育、日本語教育

1. はじめに

シドニー日本人学校は、オーストラリア政府の認可を受けた国際学級が併設されている、世界でも珍しいタイプの学校である。国際学級ではオーストラリアの教育が行われている。そして日本人学級では、我々派遣教員によって、日本の学習指導要領にのっとった教育が行われている。職員の半数以上が現地採用であり、オーストラリア永住の子が多く在籍するシドニー日本人学校では英語と日本語が自然に飛び交い、毎日が国際交流である。そんな中で過ごした3年間で学んだこと、感じたことを紹介する。

2. シドニー日本人学校の概要

シドニー日本人学校は、国立公園に隣接し、自然豊かな環境に位置する。多くの野鳥や動物が校内にやってくる。1周200ｍの陸上トラック、天然芝のグラウンドがあり、各教室には冷暖房、固定式電子黒板が完備された恵まれた教育環境である。

前述したように、国際学級が併設されている日本人学校である。国際学級ではオーストラリアの教育、日本人学級では日本の教育が行われている。各学年に両学級が1クラスずつあり（中学部は日本人学級のみ）、体育や音楽、図工の授業や行事、集会などが共同で実施される。国際学級の教員は日本語がわからないため、職員会議や授業の打ち合わせなどは基本的に英語で行われる。

3. 日本人学級と国際学級の交流

(1) 行事を通しての交流

①修学旅行

シドニー日本人学校では、5年生、6年生合同で修学旅行に行く。もちろん国際学級の子どもたちも一緒に行く。平成26年度、私は6年担任としてキャンベラへの修学旅行の引率をした。

その事前指導、旅行中の指導、事後指導において、国際学級と共通意識をもつことを大事にした。具体的には、子どもたちの持ち物や活動中のルールである。オーストラリアの学校（教員）と日本とでは、さまざまな面で違いあるので、そのすりあわせが難しい。お小遣いの額について、バスの中での過ごし方、ゲーム類の所持などについて意識の差がある。

基本は日本で指導しているような内容にしつつ、国際学級については多少幅を持たせるようなルールにした。どちらのやり方に合わせても必ずどちらかから不満が出るので、柔軟性が必要とわかった。

②スポーツデー

本校の行事の中でもっとも大きいと言ってもいいのがスポーツデーである。いわゆる運動会である。私は平成26年度、6年生の担任として「よさこいソーラン」の担当となった。

休み時間は基本的に教員も子どもも自由というのが国際学級の考え方であるが、その昼休みに「よさこいソーラン」の練習に参加するよう呼びかけた。

練習カードを配布して呼びかけたところ、日本人学級、国際学級のどちらからもたくさんの子たちが練習に参加した。

参加した子には、いろいろなキャラクターのスタンプを押したので、それがほしくて練習に来ている子も

いた。ちょっとした工夫でそういった活動に前向きになるのは、日本でも外国でも同じなのだと改めてわかった。

スポーツデーでのよさこいソーランの様子

③現地校との交流

ニューカッスルから現地校の中学生たちとシドニー日本人学校の中学部の生徒が交流するという行事がある。平成26年度は、日本人学級の6年生もおもてなしをすることになり、6年担任の私も携わった。どのようにしたら現地の子が喜ぶかという点と、日本の文化を体験させたいという点を考え、餅つき、折り紙、習字、竹馬、剣玉をやることになった。子どもたちは、英語とジェスチャーを使いながら、うまく現地の子とコミュニケーションをとっていた。

現地の子と交流するためには、まず自国の文化を理解することが大切だと改めてわかった。折り紙ができない子、竹馬ができない子、餅つきのことを知らない子が私のクラスにはたくさんいたからだ。普段から日本文化を教えていく必要性を感じた。

私は、中学部の英語を担当しているため、ニューカッスルの学校の生徒も交えて英語の授業を何時間か行った。中学生たちには、簡単なスピーチを事前に考えさせ、現地の子たちにその内容、発音、態度を審査してもらうという活動をした。お互いに適度な緊張感があり、有意義な時間になった。本校の中学生たちは、自分たちの英語が同世代の現地の生徒にどのように評価されるのかがわかり、とても参考になったようだった。

④遠足

シドニー日本人学校では、年間3回、国際学級と一緒に遠足に行く。平成27年度は、動物園、ブッシュウォーク、ハーバークルーズという内容だった。

その事前指導、旅行中の指導、事後指導において、前年度の修学旅行同様、国際学級と共通意識をもつことを大事にした。やはり持ち物やルールについてである。国際学級は、遠足にカメラや腕時計を持ってきても良い。日本人学級はできれば持たせたくない。並び方やバスの座席も国際学級は当然自由である。日本人学級は、そのあたりはきっちりとしたい。ゲーム類の所持などについても意識の差がある。柔軟性が必要だと実感した。

(2) 日常的な交流

①体育の授業

週に1時間、国際学級と合同の授業を行っている。指導内容や指導場所の都合によっては週2時間行う。

日本人学級は、オーストラリアならではのスポーツ（オーストラリアンフットボール、クリケット、ネットボールなど）を教えてもらったりした。

また、跳び箱運動やマット運動は、オーストラリアでは積極的に行われておらず、その分野では、日本人

学級の教員が指導法を教えたりした。国際学級の教員と一緒に授業を行うことで、お互いの考え方や価値観などを共有できると実感した。

②音楽の授業

スクールコンサートの前には、音楽も国際学級と一緒に行う。私は音楽の授業はもっていなかったので直接の指導はしていないが、休み時間の練習にはできるだけ見に行くようにした。

合奏の統制をとるのがとても大変だった。国際学級の子は、日本人学級の子に比べて全体的に集団行動が苦手である（集団でそろって動くという指導はされていない）。そのため、合奏では息が合わずに苦労したが、まず日本人学級がしっかりすることで、全体に浸透していったように思う。こういった場面では日本人学級の教員の出番だと感じた。

スクールコンサートの様子

4. オーストラリアの教育

せっかく身近にオーストラリアの教員がいるので、オーストラリアの教育についていろいろと聞いてみた。国際学級の先生に頼み、算数の年間指導計画をもらった。また、算数の教科書を見せてもらい、日本の算数と比較してみた。

(1) 指導法の違い

基本的に、オーストラリアでは、知識技能の習得に時間をあまりかけない。答えに行き着く過程をとても大事にするそうである。ただ、国際学級の先生に話を聞くと、話し合い活動同様、練習問題を解く時間などもたくさんとっているとのことだった。

算数ではない時間にディベートが頻繁に行われており、子どもたちで議論し合う力はとても高い。

(2) 指定教科書がない

政府によって定められた教科書がなく、学校が教材だけでなくカリキュラムまで決定できる。使われている教科書は、オリジナルのもの、市販のテキストや教師の自作のものなど、子どもたちの興味関心に合わせて選ばれている。

(3) 学習内容の違い

オーストラリアの算数は、2学年ごとに目標が設定されている。学習する順番が日本と大きく異なる。オーストラリアでは、幼稚園生がかけ算の仕組みについて学ぶが、九九のようなものは小学校6年間を通してマスターすることになっている。日本では6年生で学ぶ「円の面積」は、オーストラリアの小学生は学習しない。2学年をひとまとまりとして目標が設定されている。足し算や引き算などの配列が日本のように段階を追っておらず、一つのことをちょっとやったら次の単元にいくという印象を受ける。子どもが飽きないための工夫ということらしい。

(4) 日本語教育

シドニー日本人学校の国際学級では、現地の子に向けた日本語教育が行われている。海外での日本語教育の実態を知ることができるのは、この学校ならではのことである。日本語教育の教員に頼み、指導法のことを聞いたり、授業を見学させてもらったりした。

①カリキュラム

日本の各教科は、国で定められた学習指導要領に基づいて指導されるが、オーストラリアにはそういうものはない。各州ごとに指導要領のようなものがあり、それに従った授業をしていく。ときどき監査があり、州の方針に沿った内容を実施しているかどうかのチェックが入る。

②授業の様子

シドニー日本人学校の日本語科では、コンピュータを効果的に取り入れている。1年生ではカレンダーの作成、2年生では運動会の招待状、3～4年生では旅行のパンフレット作り、5～6年生ではパワーポイントでのプレゼンテーションなどを行っていた。漢字変換機能なども、コンピュータを使う大きな利点であると感じた。上級、中級、初級のコースに分かれて学習しているが、段階に合った指導法の工夫がなされている。話す力を伸ばすとともに、読み書き能力育成にも力を入れているところが印象的であった。

5. おわりに

シドニー日本人学校は、国際学級併設という点でとてもユニークな学校である。学校の中で日常的に国際交流ができるのは、たくさんある日本人学校の中でも数少ないであろう。もちろん難しさや課題もあるが、自然と英語に触れ、異文化を体験できる環境はすばらしいと感じた。この3年間で、私自身の視野も広がった。オーストラリアの教育を間近で見たり、オーストラリア人の教員と毎日話すことで、日本の教育のよさや課題を見つめ直すことができた。今後、日本の学校で、オーストラリアで学んだことや感じたことを伝えてよりよい教育のあり方を考えていきたい。